（第３種郵便物認可）　プレス空知　２０２４年(令和６年)１１月３０日(土曜日)

学校法人国学院大学の公式ホームページでは、傘下各校の行事や取り組み等を公開しています。
左記の二次元コードからぜひご覧ください。

学報 News CATY（ニュース キャティ）
２０２４年11月 第160号

発行／国学院大学
北海道短期大学部
滝川市文京町３－１－１
TEL0125-23-4111　FAX0125-23-5590
広報委員長　今野　道裕

渋谷キャンパスの若木祭で「ジンギスカンうどん」販売

国学院大学編入学生「滝川会」と短大と地域が連携

国学院大学の渋谷キャンパスで開催された「第142回若木祭」（学校祭）で、11月2日と3日に、短大から国学院大学へ編入学した学生が集う「滝川会」の学生と短大の自治会「学生会」の学生2名が一緒に模擬店に出店し、滝川市の郷土料理であるジンギスカンを用いた「ジンギスカンうどん」を提供しました。「滝川会」の若木祭の出店は、コロナ禍の影響もあり5年ぶりとなり、前回の令和元年度にはジンギスカンをごはんに盛り付けた「ジン丼」を提供しました。

「滝川会」と「学生会」の学生は、出店の企画・商品開発から当日までの準備を、web会議で交流しながら共同で進めました。学生会の2名は、ジンギスカンを使った新商品の開発や肉と野菜の美味しい焼き方を工夫するため、滝川の松尾ジンギスカンを訪れました。彼らはジンギスカンを食べたことはあったそうですが、この時初めて、具材の旨みが染み出たたれで煮込んだうどんを食べ、おいしさに感動したことから、渋谷キャンパスの若木祭で「ジンギスカンうどん」を販売することを決めました。具材には玉ねぎを選び、調理行程にも手をかけた「ジンギスカンうどん」が完成しました。

当日は秋晴れの天候にも恵まれ、午前中には予定販売数を売り切るほどの大盛況でした。滝川で親しまれているジンギスカンを、多くの国学院大学の学生や教職員に堪能していただきました。滝川市と短大が実施している、国学院大学観光まちづくり学部との連携・協力事業の研修で、今年8月に滝川を訪れた学生も「滝川会」のブースに顔を出してくれました。また、松尾ジンギスカンの東京営業所の方もお忙しいなかお越しくださいました。ご来店いただいた皆様、ありがとうございました。

今回の出店に当たり、滝川市役所からは地元企業の松尾ジンギスカンへの手配や調整にご協力をいただきました。また、いつも短大を支えてくださっている「国学院大学北海道短期大学部協力会」や「滝川商工会議所」から多くの支援金をいただきました。心よりお礼申し上げます。

今後も「学生会」や「滝川会」が滝川市内の関係団体と連携をさらに深めながら、滝川市の魅力を継続して発信していきたいと考えています。

短大の学生と滝川会の学生の販売で両日とも完売いたしました

松尾ジンギスカン本店で事前に試食を行いました

短大協力会様と滝川商工会議所様より支援金をいただきました

短大の学生が中心に調理を行いました

山形の郷土料理「芋煮」に舌鼓

寺嶋ゼミを中心に「芋煮会」

10月10日昼休みの中庭で、総合教養学科を中心に芋煮会が開催された。

芋煮とは山形県など東北地方に伝わる郷土料理である。材料は山形内陸部だと牛肉、里芋などの具材を醤油で味付けをして煮込むが、各地方によって多少異なる。芋煮を複数人のグループで調理する催しを芋煮会と呼び、各所の河川敷で行うのが山形県の秋の風物詩となっている。芋煮の季節になると給食にも登場し、学校の行事として催される。また、県内のスーパーやコンビニエンスストアでは大鍋などの調理器具を無償で貸出し、薪などが店頭で販売される。芋煮会は県民一丸となって行う大イベントである。

山形県出身の寺嶋将先生を中心とする寺嶋ゼミには、私を含め複数の山形県出身者が在籍していることから、国短でも本ゼミ主導で芋煮会を開催した。全国的に有名な山形の米沢牛を投入し、山形のご当地醤油である味マルジュウを使って本場の味を再現した。牛肉を煮込んだことによって生まれた旨味のある芋煮の汁を活かし、締めにはカレーうどんへと変身。多くの学生・教職員の方々に振る舞って好評を呼んだ。

山形から500㎞以上離れたこの滝川の地で、来年度また開催される日を待ちたい。（総合教養学科2年／土田蓮）

滝川で俳句 札幌で短歌 作品の魅力を愉しむ

選者に堀本裕樹氏、山田航氏

十七音に吹き込まれた「蘭」の表現

10月26日にホテル三浦華園で、俳人の堀本裕樹氏・札幌在住の歌人山田航氏をお招きし、本学教授 月岡道晴ら3人が選者となる句会「Haiku Bar」が開催された。参加者は「蘭」を題に事前投句し、作者が伏された状態で好きな作品に投票。持ち点は特選（二点）一票、並選（一点）五票。当日は主に選者が選んだ句を取り上げて批評し合った。

短大で短歌や俳句を詠む「句歌会」に所属している私は、俳句や短歌に大切な「他に誰も気づかない視点・感動」を見つけるべく、句会で詠み手が蘭から何をイメージしたのか、そのイメージを十七音でどう表現したのかに注目した。蘭の香りに酔うという句もあれば、妹が抱えるホルンと蘭の花の類似に目を見張る句、蘭を人に見立てる句もあった。それぞれの句が蘭の違う一面を映していて面白かったし、句の様々な視点が勉強になった。

また、俳句では一語（切れ字や助詞など）が句全体のイメージを大きく変えることがある。今回集まった四十五句の中にも、必然性があって相応しい箇所に置かれた詠嘆やそれを表わす付属語が多く見られ、これも勉強になった。他にも「隠国」を「こもりく」と読んだり、「生活」を「たつき」と読むなど、表現だけでなく語彙の面でもたくさん学ぶことがあり、非常に有意義な時間だった。

次回までに視点や語彙、表現方法を磨き、来年は「Haiku Bar」だけでなく、札幌で開かれる「短歌（みそひともじ）の庭」にも参加したいと強く感じた。（国文学科1年／武田晴翔）

俳句集団【itak】賞（特選）
蘭の香やラヂオかすれてゐるあひだ　小山愛梨

日本歌人クラブ賞（特選）
団地から駆け出す子らの声高く
入道雲は未来のかたち　すずきなずな

短歌の庭も会場が満員

パンデミックが落ち着いた昨年から公開句会「HaikuBar」を、俳句集団【itak】ほかの後援をいただき本学主催で再開した。壇上で句会を進行するのは従来の堀本、山田、月岡の3人。句会の翌日10月27日には日本歌人クラブほかの後援を賜り、紀伊國屋書店札幌本店インナーガーデンで公開歌会「短歌（みそひともじ）の庭」を同じ出演者で行なった。どちらも定員50名の会場が満員となる盛況で、学生や投稿歌人などの若い世代から、高齢の男女までの幅広い参加者を得られたことが特色だ。高得点者には選者や後援団体から賞が贈られ、参加者から大きな拍手が送られた。（国文学科教授／月岡道晴）

受講生3名が入選

道展鑑賞バスツアー

10月19日、幼児・児童教育学科 武石英孝教授が講師を務めるオープンカレッジ「絵画の制作」と幼児保育コース2年の武石ゼミが合同で、「道展鑑賞バスツアー」を実施し、受講生15名と学生3名が札幌市民ギャラリーで開催された第98回道展を訪れ、武石教授の解説とともに多くの絵画作品を鑑賞しました。

今回の道展では、受講生3名が見事入選を果たしました。受講8年目で初出品・初入選を果たした松本照子さんは「講座で仲間のいろいろな作品を見るうちに、挑戦しようと思った」と入選を喜び、美術展を初めて訪れた学生は「様々な技法を学べた」と作品の鑑賞を楽しみました。

また、道展会員 武石教授の「Escalier」（油彩・F100）も出品展示されました。

北海道教員採用試験に4名合格

「教職の国学院大学」の伝統を継承する本学では、今年も教員採用試験の合格者を輩出しました。小学校教員を目指す児童教育コースでは、2次試験受験者6名のうち4名が見事合格しました。

また、国学院大学へ編入学することにより、小中高の教員免許を取得することが可能となります。編入学した卒業生からも、全国各地の教員採用試験に合格との嬉しいお便りが届いています。

箱根駅伝総合優勝に期待

国学院大陸上部駅伝チーム 滝川合宿の成果発揮を

大学三大駅伝初戦の10月14日に開催の出雲駅伝では5年ぶりの優勝、11月3日に開催の第二戦全日本大学駅伝では初優勝の快挙を成し遂げた、国学院大学陸上競技部 駅伝チーム。

9月3日から6日まで毎年恒例の滝川合宿が行われ、滝川市役所前で開かれた到着式には約100人の市民や市職員の方々にお集まりいただき、平林清澄主将は「箱根駅伝総合優勝を達成したい」と決意を表しました。

来年1月2、3日に開催される箱根駅伝も引き続きご声援のほど、よろしくお願いいたします！

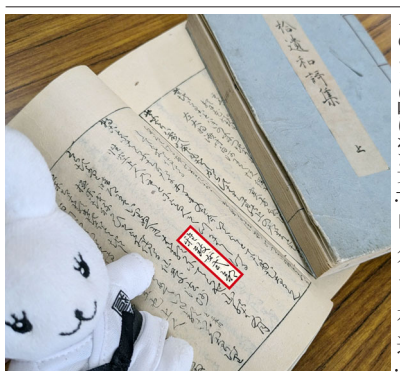
紫式部雑感 2

国文学科 准教授 渡辺開紀

大河ドラマ『光る君へ』の役柄名「まひろ・ききょう・あかね」――これらは独自の設定であり、それぞれ「紫式部・清少納言・和泉式部」に対応します。いずれも平安時代を代表する名前として思い浮かぶ人物です。ただし、広く知られるように「紫式部」は本名ではありません。「女房名」などと呼ばれ、多くは父兄弟や夫の役職名に由来します。

ドラマ中では、彼女たちが宮仕えする際に「今日から○○と名のりなさい」などと名前が与えられていました。主人から一方的に女房名を与えられるのか、それとも本人の意向が考慮されるのかは定かではありません。ですから、和泉式部にあたる「あかね」が「和泉（元夫）＋式部（父親）」という組み合わせを嫌がり、「宮の（死別した恋人であった親王）＋式部」を希望するシーンはことさら目を引きました（第38回）。

和泉式部は「雅致女式部」とも称されます。ですが、「宮の式部」と呼ばれたことはありません。また、歴史上、そのように呼ばれた女性も見つかりません。どうやら、「宮の式部」とは〝いかにもありそうだけれども、実在しない女房名〟と言えそうです。そんな風に、女房名のルールの間隙をつくかのような「宮の式部」という名を無邪気に口にしてしまうところに、「あかね」というキャラクターならではの魅力がうかがえたような気がします。


『拾遺和歌集』（平安時代成立）では、四角枠で囲った通り「雅致女式部」と記され、これが和泉式部を指す。写真の版本は幕末刊行のもの、資料提供は月岡道晴 教授による。